

期間 2016年12月15日(木)～2017年1月31日(火)  
会場 愛知県立大学 長久手キャンパス図書館 1階ロビー  
主催 愛知県立大学日本文化学部、愛知県総務部法務文書課県史編さん室、愛知県立大学長久手キャンパス図書館  
協力 名古屋大学附属図書館医学部分館 / 大学文書資料室、愛知・名古屋戦争に関する資料館

## <企画展示>

# 「愛知県史展 戦争と大学」

## 愛知県史への招待 「戦争と大学」展示に際して

愛知県域には文化遺産が満ちています。この愛知県史展では、昨年に引き続き、県域に包蔵されている史料について、『愛知県史 資料編』の既刊分47冊を手がかりとして、活字化された文献史料を紹介します。また、収録された史料のうち、ごく一部ではありますが、現物史料をあわせて展示します。さらに、『愛知県史』に未収録の史料にも目を配り、膨大な県域文化遺産の存在を想像する手がかりにしています。これら文化遺産を視野に入れつつ、人類の文化を豊かに創造する将来について、皆さんと展望したく思います。

今年度は「戦争と大学」というテーマに限定いたしました。アジア・太平洋戦争の末期、1940年代前半を中心としています。すでに敗戦から70年が過ぎた今日でも、有形無形の影響を残し、過酷と激動の歴史から展望された平和と民主主義の理想は、なおも十分に実現していません。しかも、古代や中世に比べれば近い過去だともいえるこの時代について、歴史的事実が解明され尽くしているわけではありません。たとえば、日本軍による外国での非戦闘員への蛮行の実態などは、立場の錯綜も手伝って、なお史実が共有されていません。この企画は、私たちに身近な愛知県域について、戦争の時代を具体的に知り、考える機会にする試みです。

また、この展示では、最高学府として国家の期待と使命を担った大学や大学生が、戦争とどう向き合っていたのか、という関心にも焦点を据えました。アジア太平洋戦争時代の大学と、大衆化されたといわれる今日の大学と

は、確かに違いがあります。その一方、研究力に裏づけられた高等教育機関にして社会的発言力が期待される学府として、今日から将来にも大学は存在意義をもつでしょう。ただ大学は、人々から付託される役割をもつと同時に、国家の政策と切り離せない存在でもあります。戦争時代の大学のような、今日的な状況からも顧みるに値します。しかも、愛知県域については、たとえば1943年からの学徒出陣について、史料が不足していて実態がよくわかっていません。まだまだ解明すべき課題があることを、この展示から考えてください。

県域にはなおも膨大な文化遺産が埋もれているようです。埋蔵遺物だけでなく、旧家や寺社の蔵、さらには普通のご自宅に、実は大事な遺品が眠っていることはよくあります。今回の展示でも、あらたに日本文化学部へご寄贈いただいた戦争遺品が含まれています。皆様の身近なところに、心当たりを探っていただけましたら幸いです。

なお、展示解説は、日本文化学部教員のほか、学生が執筆しています。

最後になりましたが、展示にご協力くださいました名古屋大学附属図書館医学部分館と大学文書資料室、愛知・名古屋戦争に関する資料館、鎌倉やよい様に、お礼申し上げます。

【日本文化学部 上川 通夫】

# 愛知県史

原始から現代まで地域の歴史を全58巻にまとめる県史編さん事業は平成6年度に始まりました。

県史編さん事業は、県史を通じて県民のふるさと愛知に対する意識を高めるとともに、多くの貴重な資料を県民共通の財産として後世に残し、学術及び文化の振興に資することを目的として開始されたものです。

平成10年度から刊行を開始し、平成27年度までに、通史編・資料編・別編計47巻を刊行しています。

## 全58巻の構成

### 〔通史編〕

原始・古代 中世1 中世2・織豊 近世1 近世2 近代1 近代2 近代3  
現代 年表・索引

### 〔資料編〕

考古1<旧石器・縄文> 考古2<弥生> 考古3<古墳>  
考古4<飛鳥～平安> 考古5<鎌倉～江戸>  
古代1 古代2  
中世1 中世2 中世3 織豊1 織豊2 織豊3 中世・織豊  
近世1<名古屋・熱田> 近世2<尾西・尾北> 近世3<尾東・知多>  
近世4<西三河> 近世5<東三河> 近世6<学芸>  
近世7<領主1> 近世8<領主2> 近世9<維新>  
近代1<政治・行政1> 近代2<政治・行政2>  
近代3<政治・行政3> 近代4<政治・行政4>  
近代5<農林水産業> 近代6<工業1> 近代7<工業2> 近代8<流通・金融・交通>  
近代9<社会・社会運動1> 近代10<社会・社会運動2>  
近代11<教育> 近代12<文化>

現代

### 〔別編〕

窯業1<古代 猿投系> 窯業2<中世・近世 瀬戸系> 窯業3<中世・近世 常滑系>  
民俗1<総説> 民俗2<尾張> 民俗3<三河>  
文化財1<建造物・史跡> 文化財2<絵画> 文化財3<彫刻>  
文化財4<典籍> 文化財5<工芸> 自然



原始から現代まで地域の歴史を全58巻にまとめる県史編さん事業は、平成6年度に始まりました。

県史を通じて県民のふるさと愛知に対する意識を高めるとともに、多くの貴重な資料を県民共通の財産として後世に残し、学術及び文化の振興に資することを目的として開始されたものです。

平成10年度から刊行を開始27年度までに通史編・資料編・別編47巻を刊行しています。



## 出征と見送り

戦争に出征するというのはどういうことであろう。

世界情勢や国家政策について考えることは大事だが、このコーナーでは、徴発された兵士や見送る家族・知人の立場で、その心情をも含めて、追体験の手がかりを得てみたい。

出征兵士は、地元の鎮守社などで華々しく見送られた。入營の出で立ちの若人が、寄せ書きいっぱいの日丸を抱いて、不安を隠す表情の家族や、激励の声をあげる隣組の人々と対面しつつ、敬礼して去って行く。こういう定型化した場面をテレビドラマなどで目にすることがある。知りたいのは、兵士や家族や知人たちの真情である。戦争への総動員体制下にあつて、表に現れにくい人の思いを知る手がかりは、どのような史料に残されているであろうか。

このコーナーで意図するのは、実物史料を目の当たりにして、豊かな想像力を開放しつつ、実状をリアルに思い描く場にするのである。

日丸の寄せ書きや、千人針の形式は決まっている。とはいえ一筆ごと、一針ごとの思いはさまざまであろう。人間諸活動の痕跡である歴史史料には、往々にして、どこかに本当の思いが刻まれている。

展示した日丸の寄せ書きに記された俳句には、なかば即興的に母と息子の絆が詠まれている。千人針の裏側には、家族のもとへ帰らせようとする風俗的な祈りを反映した絵がある。「出征兵士の家」に残された母親は、幼子たちの防空頭巾に心安まるデザインを工夫した。召集令状や徴兵検査通達書をあえて残した出征者がいる。

歴史の真実を表に出す作業は、これからまだまだ必要である。皆様のご自宅などに、出番を待っている遺品はないでしょうか。心当たりがあれば、ぜひともご一報をお願いしたい。

## 大学の動員

アジア・太平洋戦争の末期には、学徒動員や学徒出陣が命じられた。

学徒動員は、中等学校以上の生徒や学生を労働力として軍需産業等に駆り出すことで、1943年（昭和18年）以降に推進されていった。これに対して学徒出陣は、20歳以上の主に文科系の学生を兵士として徴発し、直接戦地へと出征させたことを指す。戦局悪化と戦死者増加で、兵力不足が深刻化したのである。

それまでの兵役法などでは、大学や高等学校・専門学校（いずれも旧制）の学生は、26歳まで徴兵猶予されていた。これら高等教育機関への就学率は5%以下だったとされ、多くは富裕層出身者や知的エリートだといえる。1943年10月1日、東条英機内閣は、理工系と教員養成系を除く文科系の在學生について、徴兵延期を撤廃した。そしてすぐに徴兵検査を実施し、合格者を12月に入隊させた。翌年には徴兵適齢を20歳から19歳に引き下げた。

1943年10月21日に、東京の明治神宮外苑競技場で、東条首相たちも出席して盛大な出陣学徒壮行会が開かれた。文部省主催である。学徒出陣による入隊者は、陸軍の幹部候補生・特別操縦見習士官・特別甲種幹部候補生や、海軍の予備学生・予備生徒となり、指揮官となって激戦地に配属される者が多かった。44年末からは、特別攻撃隊に配属される学徒兵も多数いたるのである。なお、学徒兵の総数は13万ともいわれるがはっきりしない。

学徒出陣の対象となったのは主に文科系学生である。理科系学生は兵器開発など、戦争継続に不可欠な人材として徴兵猶予が継続され、陸軍・海軍の研究所などに勤労働員された。戦時の大学は、国家の下請け的なシンクタンクとしての性格を強めた。

文系と理系に対する戦争動員方法の違いは、国家の「人材」認識なるものをよく表している。今日の政府や世論は、文系と理系の大学をどう位置づけているであろうか。戦争放棄した敗戦後の日本には、徴兵制度自体が消滅したが、同時に、大学は戦争目的の軍事研究をしないこととなったはずである。とはいえなお、戦時体制下の大学史から学ばねばならない状況は消えていない。

## 知識への意欲と生死の省察 —愛知県立大学の蔵書から—

愛知県立大学の図書館には 60 万冊を越える蔵書がある（長久手キャンパスと守山キャンパスの合計）。戦後すぐの 1947 年（昭和 22）に愛知県立女子専門学校として開学されたことに始まる本学には、敗戦以前の図書も多い。中身あつての書物だが、存在自体に歴史的な価値が付加されることもある。近現代史を「戦争と大学」というテーマで振り返った場合、若き知的エリートたちの知的欲求や人生省察の姿について、書物の内容と存在を通じて知ることができる。

展示では、戦没学生の手記として著名な『はるかなる山河に』（1947 年）と『きけわだつみのこえ』から、愛知県出身者の部分を選んだ。今日に生きる私たち、特に大学生はどう受けとめるだろうか。本学学生によるキャプションをも参考に、じっくりと読んでいただきたい。

徴兵を目前にした大学生たちは、国策の善悪を考究する余裕も条件もなく、人生の短さを実感しつつ、自らの生と死にどのような意味を見いだして納得すればよいのか、文字通り必死の思いで学術書に挑んだ。国家による出版制限が厳しく、政治社会問題を客観的に分析する社会科学の良書を欠いていた事情もあって、哲学的な世界観に関する著書がよく読まれたという。しかしそれも、知識成立の根底を問う認識論から出発するのではなく、国家の道義的使命や民族の世界史的使命といった、国策に根拠を与える論調の書物が主流だった。歴史学についても、日本人の精神生活を国体観念に結びつけ、紀元 2600 年といった天皇神話を基軸とする非科学的な論述が幅をきかせた。

田辺元の哲学書は、死生観を求めてやまない学徒兵に強い影響を与えた書物の代表である。抽象度が高く難解だが、「国家の道義性」のもとに「決死の覚悟」なる理想を説く内容は、割り切れない思いで死地に臨む学徒兵にとって、すぎるような思いで読まれたらしい。1946 年 5 月に、シンガポールの刑務所で戦犯刑死した木村久夫氏による田辺元『哲学通論』への書き込みは、その生々しさを伝えている。学問の重大な責任が痛感される。

## 弾圧と抵抗

時代別に編集された『愛知県史資料編』のうち、近代に関しては12冊があげられている。その内訳として、「政治・行政」(4冊)、「農林水産業」(1冊)、「工業」(2冊)、「流通・金融・交通」(1冊)、「社会・社会運動」(2冊)、「教育」(1冊)、「文化」(1冊)に分類されている。1冊は900ページを越え、各ページは2段組であるから、まさに大部な書物である。

しかし、実際に存在する文献の総量からすれば、氷山の一角が活字にされたというのが実態である。古代編(2冊)が、見いだされた文献すべてを収録する方針であるのと対比してほしい。作成量も残存量も、時代が新しいほど多い。ただし、人間社会に生起している事象が無限であるのは、時代を問わない。どの時代についても、文献は歴史の痕跡であることに、最大限の注意が必要である。

『愛知県史資料編33 近代10 社会・社会運動2』は、1919年から1945年を範囲としている。章のタイトルを拾うと、次のようである。

「県民生活の動向」 「女性の希望と現実」 「地域社会・農村」  
「都市化の進展と都市の生態」 「マイノリティの社会と生活」  
「社会事業の展開」 「戦争・軍隊と県民」 「宗教と祭礼」  
「労働者の状態と労働運動」 「農民問題と農民運動」  
「左翼無産運動と右翼運動」 「反戦・反軍運動と平和論」  
「市民・住民の運動」 「女性運動の諸相」 「マイノリティの社会運動」 「総力戦下の県民生活」 「戦時動員の強化」 「本土空襲と戦時災害」  
「総力戦体制への抵抗と弾圧」

時代が新しくても、文字にならなかつたり、書かれても残されないこともある。社会的な弱者にそのことが当てはまる場合が多い。一方、事例そのものは多くないが、意味が大きいものもある。

この巻をひもとくと、生き生きとした人間の意思と生活、苦渋と葛藤の向こうにうかがうことのできる希望、といったことに惹きつけられる。展示テーマにそくした史料は決して多くないが、稀少な史料が示す歴史の重みについては、考えるヒントに満ちている。



## [関連企画]公開講演会「戦争と大学」

開催日:2017年1月29日(日) 13:00 ~ 15:30

会 場:愛知県立大学長久手キャンパス特別講義棟(S棟)S201

主 催:愛知県立大学日本文化学部、愛知県総務部法務文書課県史編さん室

共 催:愛知県立大学地域連携センター

協 力:名古屋大学附属図書館医学部分館 / 大学文書資料室、愛知・名古屋  
戦争に関する資料館

講演題目と講師

### 『歴史学の反省 一過去・現在・未来一』

講師:岩井 忠熊 氏(元海軍特攻隊員・歴史学者・立命館大学名誉教授)

岩井忠熊氏 (いわい ただくま、1922年 - )

歴史学者。専攻は日本近代史。立命館大学名誉教授。もと海軍特攻隊員。

略歴

1922年8月 熊本市に生れる。少年時代を大連市(中国旅大市)で育つ。

1941年4月 姫路高等学校文科乙類入学(1943年9月卒業)。

1943年10月 京都帝国大学文学部史学科入学。

1943年12月 兵役(1945年8月復員)。

1948年3月 京都大学文学部史学科卒業。4月 京都大学大学院入学。

1949年4月 立命館専門学校専任講師。1951年5月 立命館大学専任講師。

1955年4月 立命館大学助教授。1965年4月 立命館大学教授。

1988年3月 立命館大学定年退職(4月名誉教授)。

主な著書

『日本近代思想の成立』(創元社、1959年)

『明治国家主義思想史研究』(青木書店、1972年)

『天皇制と日本文化論』(文理閣、1987年)

『天皇制と歴史学』(かもがわ出版、1990年)

『学徒出陣 - “わだつみ世代”の伝言』(かもがわ出版、1993年)

『明治天皇 - 「大帝」伝説』(三省堂、1997年)

『大陸侵略は避け難い道だったのか - 近代日本の選択』(かもがわ出版、1997年)

『近代天皇制のイデオロギー』(新日本出版社、1998年)

『特攻 自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言』(岩井忠正と共著、新日本出版社、2002年)

『西園寺公望 - 最後の元老』(岩波書店、2003年)

『戦争をはさんだ年輪 一歴史研究者のあゆみ』(部落問題研究所、2003年)

『陸軍・秘密情報機関の男』(新日本出版社、2005年)

『「靖国」と日本の戦争』(新日本出版社、2008年)

『十五年戦争期の京大学生運動 -戦争とファシズムに抵抗した青春』(文理閣、2014年)

## 平和県宣言

戦争のない世界、原水爆脅威のない世界は、  
全人類の悲願である。

愛知県は、全世界の人々と手を携えて人類永  
遠の平和と幸福実現のために努力する平和県で  
あることを宣言する。

昭和三十八年九月三十日

愛 知 県 議 会

## 名古屋市平和都市宣言

宣 言

世界恒久の平和を希求し、子孫に恵沢を確保する  
のは、全人類の悲願であり、われらが戦争を永遠に  
放棄したのも、この人類普遍の原理に由来する。

名古屋市は、原水爆の脅威から免れ全人類の平和  
と幸福を熱望する全世界の人々と相より相扶けて、  
人類永遠の平和確立のため努力する。

右宣言する。

昭和三十八年九月十八日

名 古 屋 市 会

## ＜展示資料一覧＞

### (1) 「日の丸」

鎌倉やよい氏寄贈、愛知県立大学日本文化学部所蔵

戦地に赴く兵士に託された日章旗であり、「国威発揚」「武運長久」といった決まり文句とともに、出征を見送る



身近な人々の寄せ書きがある。絹地の高級品である。注目されるのは、寄せ書きに含まれる「明日征くや母の膝下に暮れはせし」という俳句である。いよいよ明日の出征には、日の丸のような太陽のもとで晴れやかに見送られるかもしれないけれど、夕暮れにはすでに母の下を離れてしまっていることよ、といった感慨であろうか。国のために出征する表向きの勇ましきの陰で、真情がいかにあつたかを偲ばせる。1944年（昭和19）に出征して陸軍浜松航空隊に入営した加藤和夫氏（当時名古屋市瑞穂区、20歳）の遺品。1945年9月、加藤氏は無事に帰宅された。

### (2) 「千人針」

鎌倉やよい氏寄贈、愛知県立大学日本文化学部所蔵



兵士が腹に巻いたり帽子に縫い付けたりした、銃弾よけのお守り。多くの女性に糸を縫い付けてもらうことで、その祈念の力が発揮されるとされた。本品には、表側に達磨の絵と「必勝」「七転八起」などの文字がある。裏側には虎の絵がある。「虎は千里行って千里戻る」ということわざを踏まえ、無事の帰還を祈るしるしだといわれている。ただこのことわざには、

巣穴にいる家族のもとに戻るという意味もあることに注意したい。  
日の丸と同じく、加藤和夫氏の遺品。

---

## 日の丸と千人針の持ち主について

---

氏名：加藤和夫

生没年：出生：大正 14 年 2 月 1 日 没年：平成 26 年 12 月 8 日

出征直前の職業：陸軍造兵所熱田工場 技術職員  
尋常高等小学校卒業後、陸軍造兵所技能者養成所卒業後、上記へ就職

出征時の年齢：数えの 20 歳、満 19 歳  
徴兵検査を受ける義務があり、甲種合格となった。

出征時に住んでいたところ：名古屋市瑞穂区片坂町

出征年：昭和 19 年

出征先：浜松航空隊に入営 通信兵

その後、転々と配属先が変わった様子だが、はがきは墨で黒く塗りつぶされ、極秘事項として、どこに配属されたかは不明。しかし、外地には配属されなかった様子。

除隊：昭和 20 年 9 月に突然に帰宅

出征時の様子：妹である佐治久美子 88 歳（当時造兵所に勤務）の話

町内の兵士を出した家の玄関には「出征兵士の家」と張り紙があり、戦死した兵士の家には「英霊の家」と張り紙があり、それらの家の前を通るとき、みな頭を下げて通った。兵士を出していない家は肩身が狭く、出征していないことが恥の風潮があった。

そのため、和夫が出征し、両親は安堵感を感じたとのことだった。これまで出征時は町内を超えて人々が神社に集まり、武運長久を祈って神主がお祓いして、お国のために「ばんざい」と唱和して送り出していた。

和夫の出征時には、町内の者のみから、めでたいと祝福されて、大きな鯉を贈られた。しかし、神社でのお祓いはなく、ひっそりと出征したといった感があった。

また、和夫がまれに帰宅することがあったが、枕元に軍服と背囊をおき、呼び出しにすぐに対応できるようにしていた。

当時、大本営発表としてラジオの放送、新聞とも、勝利のみが伝えられていた。昭和 19 年の暮れに東南海地震があり、相当な被害があったが、地震の事実のみが小さく掲載され、実際の甚大な被害については報道されなかった。少しでも批判をすると、密告制度があり、警察が監視することがあった。実際、隣家の長男が警察から監視されていた。8月6日の広島市への原爆投下も報道されなかったが、8月8日には「ピカドンが落ちた」との噂が名古屋まで伝わり、この先 100 年間広島には草も生えないと噂された。

どうして出征や戦死を「おめでとう」と言わなければならなかったのか、今から思うと狂った時代だった。戦争は人を狂わせる。

その他：父親が結核となり、和夫が出征後に入鹿池の近くの陸軍病院に入院。父親は、和夫帰宅の情報を聞き、会いたい一心で無断離院し自宅にもどる。病状が悪化し、動けなくなりそのまま、2階に就寝して療養していた。母親が看病し、子供たちには結核が移るから2階には来るなど言われていたが、父親が死亡、その1年後には家族内感染で母親が死亡した。その後は、和夫が中心となって、5人の兄弟姉妹で生き抜いた。

鎌倉記

以上は、鎌倉やよい先生（本学名誉教授、日本赤十字豊田看護大学学長）よりご提供いただいた、加藤和夫氏の妹様（鎌倉先生のお母様）からの聞き取りの内容です。2016年12月4日に聞き取っていただきました。

### (3) 「防空頭巾」

丸山裕美子氏寄贈、愛知県立  
大学日本文化学部所蔵

アジア太平洋戦争末期、各地  
で空襲が激しさを増すなか、  
頭を護るために使用された頭巾。

綿入りの布で作られており、爆弾の

破片や落下物から頭部を保護した。展示品は広島

県沼隈郡松永町（現在の広島県福山市松永町）の一家（祖父母、父  
母、子二人）のもの。住所・名前・年齢を書いた名札がつけられて  
いる。ぜいたくや華美は禁じられていたので、色は地味であるが、  
柄を組み合わせ、同系の色でまとめ、裏地には絹を使うなどの工夫  
がみられる。男の子のものは紺の緋、女の子用には裏地に可愛いウ  
サギの模様を使っており、母親の心配りがうかがえる。



（左）1940年（昭和15）夏の一家の写真。前列中央の男性（一家の父）の応召記念に撮影されたもの。後列の若い男性2人（父の弟）はこの後出征し、1人（後列中央）は硫黄島で戦死した。

（右）1944年（昭和19）正月の一家の写真。正月にはまだ晴れ着を着ることもあった。

#### (4) 「充員召集令状（「赤紙」）」 1943年（昭和18）

愛知・名古屋戦争に関する資料館所蔵、『愛知県史資料編  
33』収録

現役兵として召集する者以外の、在郷軍人を軍隊に召集する際に出された命令書である。使用された紙の色によって「赤紙」とも呼ばれた。書面には、召集部隊、召集所、日時が指定されている。左側の部分を提示することで召集所までの交通運賃は免除される。充員召集令状は、20歳代後半から30歳代半ばが対象とされたが、戦況が悪化した1945年ごろには40歳代の退役軍人にも発給された。召集令状はほとんど回収されてしまうため、遺存する現物はかなり貴重である。

#### (5) 「徴兵検査通達書」 1945年（昭和20）

愛知・名古屋戦争に関する資料館所蔵、『愛知県史資料編  
33』収録

1945年(昭和20)以前の日本では、満20歳に達する男子は、特別の場合を除き、徴兵検査を受けることが義務づけられていた。身体検査の成績は、甲・乙・丙・丁・戊種に分けられ、丙種まで合格とされた。合格した場合は現役兵として入営するか、補充兵に組み入れられた。アジア太平洋地域のころには、徴兵検査に臨んだ人員の5割から7割が戦場に行ったとされている。徴兵検査通達書には、昭和20年3月10日6時30分に本所区役所へ出頭するよう記されている。また右欄外には「防空警報発令中モ検査ヲ実施ス」とある。まさに東京大空襲の内でも最も激しい攻撃のあった日で、死者約10万人であった。午前0時過ぎからの爆撃は本所区も対象とされたから、この日に検査が行われたとは思われない。

#### (6) 『昭和19年度徴兵検査の葉』 1944年（昭和19）

愛知・名古屋戦争に関する資料館所蔵、『愛知県史資料編  
33』収録

徴兵検査を受けることになった者に配布される葉。徴兵検査は満 20 歳を迎えた男子が受けることを義務づけられ、体格、知能、病気の有無などが調べられた。年 1 回、地域の集会所や学校が検査場となり、合格者の中から徴兵された。葉には、検査を受けるにあたっての注意事項や、検査を猶予する際の手続きなどが書かれており、実際に検査当日に持参されたものである。葉 23 ページには、大学生は徴兵検査を猶予する旨が明記されており、注目される。

**(7) 『報国会々報』 創刊号・第二号 1941・42 年 (昭和 16・17)**

名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵

1940 年(昭和 15)10 月、文部大臣が帝国大学総長会議等に臨み、学友会を改組して報国団を結成するよう訓示した。翌 41 年 5 月 1 日に名古屋帝国大学報国会結成され、初代総長の渋沢元治が会長となった。そして 42 年 12 月に、渋沢報国隊長が出動通知書を出したのである。本資料は、愛知県東春日井郡牛山で航空機滑走路整備作業に当たる報国隊の出動について記している。

**(8) 『技術員「戦時研究員制度について」』 1944 年(昭和 19)12 月**

名古屋大学 大学文書資料室所蔵

1943 年(昭和 18) 10 月、内閣は技術院(1942 年新設)の主導による戦時研究員制度を設けた。内閣総理大臣を長とする研究動員会議で、戦争遂行のために全力を挙げて取り組む科学技術の重要課題が決定されたのである。44 年の戦時研究員は 1,122 人、研究課題は 183 件である。そのうち陸軍省と海軍省が担当するものは実に 7 割を占めている。

**(9) 『戦時研究要員調書提出に関する件』 1945 年 4 月**

名古屋大学 大学文書資料室所蔵

戦況の悪化につれて、大学での研究を戦争遂行のために動員する制



度が急速に整備された。1943年8月には「科学研究ノ緊急整備方策要綱」が閣議決定されており、研究者への戦時動員体制が強化された。その後も、大学所属の研究者の動員を担当する文部省科学局を中心に科学者動員体制が進み、主に帝国大学の理系を動員し、学内に陸海軍の研究所分所さえ設置されていた。本資料は、大学教授等を戦時研究員に任命し、それを補佐して研究を遂行する補助研究員・研究助手・技術工員などの戦時研究要員を調える過程での書類である。

## (10) 「出陣学徒壮行会写真」1943年

(陸軍省報道部監修・朝日新聞社発行『勝たずして何の我等ぞ』  
収録 1944年3月)

学徒出陣の壮行会は、1943年(昭和18)10月21日に東京明治神宮外苑競技場で第1回が行われ、11月にかけて各地(台湾・朝鮮・満州・上海を含む)で12回行われた。名古屋では11月19日に「東海地区学徒聯合演習及び出陣学徒壮行式」として実施された。人数その他、史料が残されておらず不明なことが多い。掲載誌は、迫力あるモノクロ写真と、勇ましい短いキャプションで構成された冊子。「大東亜戦争第三年の陸軍記念日」に合わせて陸軍省報道部が全国一斉に開催した「強く耐えよ」写真展をもとに再編集されたもの。

## (11) 『井上長の短歌』【戦没学生の手記、『はるかなる山河に』(1947年)・

『きけわだつみのこえ』(1949年)から】

『きけわだつみのこえ』p.266～267

(豊橋市生まれ、東京大学法学部、1943年入営、45年7月24日江田島付近で戦死)

6首の短歌が遺された。冒頭の一首、「ひややけき瓶の水吸いひそやかにひたすらに生くさざんかの花」に注目したい。一輪挿しのように瓶に「生(活)けられた」花を詠んだだけではないだろう。「生く」

は、さざんかの花が「生きる」ことと、自分が「生きる」ことを比較しているのではないだろうか。また、瓶の中の水を吸うことでしか生きられないさざんかの花に、自分を重ねてみているのではないだろうか。さざんかは「ひたすら」に生きるけれど、自分はどうか。青年の、己の生きる理由が問いかけられた歌のように、私は思う。

**(12) 『鈴木實の遺書』【戦没学生の手記、『はるかなる山河に』(1947年)・『きけわだつみのこえ』(1949年)から】**

『きけわだつみのこえ』 p.275～276

(愛知県出身、第八高校から東京大学法学部、1944年入営、  
45年8月25日死亡)

広島に投下された原子爆弾によって負傷した彼は、最期の力をふりしぼって書いたのだろう。書き終えた30分後、息を引き取ったのである。親孝行の出来ない自分を許してほしいという文で始まり、大学に進学した喜び、姉妹たちへの思いが綴られ、また最後には治療に関わった医師らへの感謝が述べられ、今生で最後となる自分の本名をしたためて終わっている。火傷の苦痛があるだろうに、彼は最期に感謝しか書かなかったのだ。「原子爆弾ハ威力ノアルモノデシタ」という一文は、彼の精一杯の叫びではないだろうか。

**(13) 『森本浩文の手記』【戦没学生の手記、『はるかなる山河に』(1947年)・『きけわだつみのこえ』(1949年)から】**

『はるかなる山河に』 p.105～108

(第八高等学校から東大法学部、1943年12月入営、44年10月台湾方面で戦死)

軍隊生活を始めて1年以上経過してから書かれたものである、ということ念頭に置きたい。厳しい訓練や教育を受けたに違いない。国家への忠誠を強要されもしたであろう。しかし文面に負の感情はほとんど見当たらない。天気や景色に触れたり、家族への

感謝を述べたりしている。一方、天皇陛下万歳といった内容もない。感謝し信じているのは自分の「運命の女神」、氏神様、監尾寺様、そして母の信心といった身近なものだけである。自分は精神的にも身体的にも変わらないから大丈夫だと言っているようである。とはいえ文面の各所に散りばめられた物悲しさが、うっすらと本音を伝えていはしないだろうか。

#### (14) 【ファシズム期の人文科学①—京都学派の哲学—】

西田幾多郎『善の研究』（1911年、弘道館）

高山岩男『西田哲学』（1935年、岩波書店）

田辺元『哲学通論』（1933年、岩波書店）

1946年5月シンガポールの刑務所で戦犯刑死した木村久夫氏による田辺元『哲学通論』への書き込み。加古陽治『真実の「わだつみ」』（2014年、東京新聞）より。

田辺元「国家の道義性」（『中央公論』第650号）

（第八高等学校から東大法学部、1943年12月入営、44年10月 台湾方面で戦死）

京都帝国大学教授の西田幾多郎や田辺元たちは、西洋哲学に対峙して東洋哲学を再評価する原理的思索を特徴とし、大学生に強い影響を与えた。特に田辺『哲学通論』は最もよく読まれたという。敗戦後に戦犯としてシンガポールで刑死した木村久夫氏の所持本には、詳細な書き込みがある。田辺は声高には国策迎合説を唱えなかったが、「決死」の実践的立場という説は、死生観をもとめる学徒兵の心を動かした。ただ論文「国家の道義性」は、「妄想するなかれ」と結ぶ。もと水上特攻隊員にして近代史研究者になられた岩井忠熊氏は、「『百日の説法、屁一つ』という思いにかられざるをえない」と振り返っておられる。

#### (15) 【ファシズム期の人文科学②—皇国史観・日本浪漫派—】

平泉澄『中世に於ける精神生活』（1926年、至文堂）

平泉澄『中世に於ける国体観念』（岩波講座日本歴史第四巻、1933年、岩波書店）

京都帝国大学文学部史学科編『紀元二千六百年記念史学論文集』（1941年）

西田直二郎「天業恢弘—日本書紀叙述の精神史的考察—」

保田与重郎『戴冠詩人の御一人者』（1938年、東京堂）

『万葉集の精神』（1942年、筑摩書房）

近代学問としての歴史学と文学研究は、国史学と国文学として出発した。紆余曲折がありながらも国民国家として独立した日本を支える学問として、自国の研究を自国の学者が自国の言葉で研究し、膨大な実証成果を蓄積した。そのことは反面で、世界への発信力や、世界水準で相互に議論する機会と方法を持ちにくくさせた。ファシズム期には、その弱点が露呈した。独善的かつ観念的な日本至上主義が学問的装いで跋扈し、国策を支えることになったのである。著書や論文に踊るタイトルを一覧していただきたい。

## (16) 「息子の戦死は「犬死」、戦争は罪悪」 1943年 11月 20日

『特高月報』（複製）『愛知県史資料編 33』収録

息子が戦死したという報せを受けて、その両親が作成した葉書と、母親の作った短歌が載せられています。そのどちらからも、子を失った親の痛ましい慟哭が聴こえてくるようです。「戦争は大罪悪」と記す行為こそが大罪悪とされていた時代にあって、特別高等警察のしたことは、果たして「説諭」の域に留まったのでしょうか。「母をさへよぶことさへもゆるされで」、と詠んだ女性が心からの「感動自省」などできたのでしょうか。治安維持法の番人として特高が力をふるった時代背景や、『特高月報』が他ならぬ特高自身の手によって編まれたことなどに鑑みて考察する必要がありそうです。

### (17) 「戦争と天皇制批判の発言」 1943年5月20日

『特高月報』（複製）『愛知県史資料編33』収録

1943年、23歳の青年が不穏事件の張本として検挙された。彼は職場で戦争の不要さ、万世一系とされてきた天皇への批判、また「国民の中には天皇より偉い人物は幾らでもある」など、天皇制を批判した。さらに、政府と戦うためにゲリラ戦を計画しているとも言った。そう、彼は同僚に「言った」のである。特高はどうして彼の話を知ることができたのだろうか。特高は、彼の勤める野菜工場に潜入していたのだろうか。もしかしたら、話を聞いた同僚が……？ 当時の人間関係についても考えさせられる文である。

### (18) 「名大医学部左翼グループの活動」 1943年6月28日

『特高月報』（複製）『愛知県史資料編33』収録

名古屋帝国大学医学部を卒業した医師4人を取り調べ、判明した左翼活動について記されている。短歌会、文芸集団、木曜会、学内紛争策動、東北地方無医村での活動が調べられた。特に無医村での活動が大きく取りあげられている。この調査報告からうかがえるグループの考えはなかなか納得のいくものだが、それを「妄信」だと断言している落差がおもしろい。彼らの思想と行動に対して、「同志」「プロレタリアート」「共産主義社会」「左翼的見知」「共産主義観点」など紋切り型の語を多用する決めつけ方は、彼らが過激に「妄信」していたことを強調する意図によるのであろう。

### (19) 「立命館動員学徒の抵抗」(豊川海軍工廠)1945年4-5月

豊川海軍工廠第一男子学徒寮 立命館勤労報国隊本部「動員日誌」(『愛知県史資料編 33』収録) (複製)

1943年10月、文部省は「教育に関する戦時非常措置方策に関する件」を通達し、「学校教育の敵前転回」だとして、大学専門部を専門学校へ転換させた。その上で学徒の勤労働員数を急激に増やした。立命館大学もそれに該当し、豊川海軍工廠に258人が動員された。本史料からは、抵抗する学生がいることと、懲罰をめぐる学校側と工場側が対立していることなどがわかる。また動員学徒は「角帽」(学生帽)をかぶり続けていた。“自分たちは学生であり、兵の一員ではない”との意思の表れであろう。軍事工場が空爆にあえば大惨事になる。実際、1945年8月7日、米軍の空襲を受けて2,517名が犠牲となった(うち動員学徒は452名)。

### (20) 『愛知県立女子専門学校第一回卒業生』1950年(昭和25)

愛知県立大学所蔵

1947年に開校した愛知県立女子専門学校の初回卒業生の卒業アルバム。その後、県立女子短期大学、県立女子大学、1966年男女共学の県立大学の誕生へと発展してきた。1998年に長久手に移転。2009年の県立看護大学との統合を経て現在に至る。

※ 解説文とキャプションは、日本文化学部教員及び学生による。